# 第十章　藤田謙一の人物像

世に偉大な人物も視点によっては凡なる存在であり、世間はむしろ引きずりおろした形での話を好む。藤田謙一についてもそのような人物評がないわけでない。特に悲劇的なのは身内での評価であろう。

東奥日報、昭和二十七年九月三日号に「うら盆に故人を語る」シリーズ②に藤田謙一の甥の明石透氏と昭氏の談話が載っている。

透氏は「伯父はいわゆる人情家ではなかったようです。他人の面倒はみるが身内にはむしろ冷たかった。私の父(謙一氏の末弟)も藤田合名におったが、他の社員に比べて少しも給料は多くなかった。」「父が死んで私が満州へゆくことになった。母は小さい弟を手離したくなかったが伯父は〝置いていきなさい。甘やかすのは一番悪い〟といった。」

その弟昭氏はこう語った。「大森の森ケ崎にあった藤田育英社から市川の二中に通った。電車で二時間二十分もかかる。先生が〝君、疲れるから寄宿しなさい〟といった。伯父に話したら寄宿舎はダラクの温床だと許してくれなかった」また「常に仕事をさせた。仕事がなくなると庭石の位置を変えさせたりして暇を与えなかった。伯父は若いころ相当苦労したというが、ボクらには何一つ話したことはなかった。」

東奥日報の記者は藤田謙一について色々なコメントをはさんでいる。たとえば「仕事に関する限り冷徹氷のような人であったかも知れない。永年使った社員でもダメになるとクビにした。敵が多かった。」「藤田謙一修養訓というのがある。〝三寸の舌で五尺の身体を養いもするし失いもする。絶えず飲

むものは味わず、常に話すものは考えず、智者は一切を自身に求め、愚者は一切を他人に求む。誰も好機に遇わざるものなし、これを捕えざりしのみ、余り考え過すものは何事も為し難し〃彼自身も決断が早かった。一切を己れに求めるといった点も然り、それだけの自信家でもあったろう」と。

東奥日報記者のペンは藤田謙一を直接に知ってるような、また知らないような不確かな文を書いている。次に直接彼に長く、深く接した人からみた人物像を思い出として描いてもらおう。

## 父の想い出

不破謙友
（謙一の三男不破家養子
元日本硝子繊維常務
ゼニガタコンゴロ会長
昭和60年6月歿）

この度亡父の伝記編纂のお話しが関係各位の御尽力によりまして、出版の運びとなり、私にも何か想い出を書くようにとの御連絡を受けましたので、思い出すままに書かせて頂きます。

最初に思い出されるのは、一般の家庭と比べますと、父と顔を合わす機会が大変少なかった事だろうと思います。

私が慶応義塾の幼稚舎、普通部、予科を卒業するまでは、一年の内正月の三日間と大晦日又は、夏休み中に伊豆長岡の別荘などに数日参ります以外は、一つ屋根の下に居りましても、朝と夜の時間的な違いと、日曜日でも必ず事務所に参りますので、顔を合わす機会は、殆んどありませんでした。

従いまして、小学校入学以前は、鎌倉の別荘で海岸を一緒に散歩したことが、微かな記憶として残っている程度です。

大正十二年の大震災の時は、父と姉は東京赤坂星ケ岡の別荘に居り、母の祖母と、母と六人の兄弟妹は、鎌倉の別荘で津浪に合い、別荘は全壊しましたが、幸い全員無事でした。

この時父は我々の安否を心配して、東京より海上、陸上両方から人を派遣してくれましたが、僕等の家庭教師の畑要造さんが、自転車で陸上から一番早く救援に来てくれました。

その後道路の回復が遅れましたので、約一ケ月後に東京に帰りまして、我々の無事を心から喜んでくれた父の顔を見た時ほど、親父の頼もしさ、有難さが、子供心に強く感激した事を今でも思い出されます。

私が普通部一年生（昭和三年）の時に、父はジュネーブへ国際労働会議の使用者側代表として、訪欧致しましたが、帰国後の土産話の中で、印象に残っている思い出話がございます。

シベリヤ鉄道の食堂車で、朝食の注文を致しまして、通訳が何回言ってもボーイに通じないらしいので、父は短気の方ですからいらいらして、自分で紙を持ってこさせ、鶏の卵を生んだ処の絵を書いて、「卵焼をもって来てくれ」と、どなったら早速ボーイが持って来たそうです。この時の絵は即興にしては、なかなか上手だったそうです。

絵と言えば、正月など人から依頼された色紙、掛軸などの揮毫をした後で、色紙に俳句を添えて亀などの墨絵を書いて、御機嫌でした。

しかし、所謂趣味は何もなく、人に聞かれると、「趣味は仕事をすること」と申して居ったようです。

やはり訪欧中の事ですが、フランスのパリで、父が各国代表を招待した時に、宴会中にいろいろと洒落た遊びがあるそうですが、マッチのケースを、鼻と鼻とでうまく受取り次の人に廻して行く遊びをやった時に、外人は鼻が高いので、縦にマッチのケースを受けますが、父は団子鼻なので、咄嗟に首を曲げて横にケースを受取って次に廻したそうで、その瞬間の思い付きでやった事が、拍手喝采を受けたそうで、不粋と言われていた父もなかなかユーモアな一面があったようです。

昭和十三年三月に大学を卒業して、会社勤めとなってからは、学生時代より幾分話しをする機会も出来ました。

大学卒業まで延期されていた徴兵検査の日、父には何も申して居りませんでしたのに、朝五時に出掛ける時、玄関まで来てくれまして「気をつけて、いって来なさい」と送ってくれた時は、平素あまり顔を合わすことがなかっただけに、その感激は今でも心に残って居ります。

その後昭和十四年に当時中国汪兆銘政府閣僚の周佛海、梅思平、羅君強（ラクンキョウ）の長男三人を陸軍の要請により預り、亦その前当時蒙古の徳王の長男「トガルソロン」が日本に留学に参りました時、山王ホテルでは騒音のため神経が疲労すると言う理由でやはり荏原の家に預りましたが、当時家には、両親と私と妹の四人しか居りませんでしたので、私が彼等の相手をすることになり、従って連絡等のため父と接する機会が多くなりました。

昭和二十年三月私も千葉県佐倉の聯隊に召集となり、終戦後十一月に森ケ崎の家に帰って参りましたが、父はその時既に病床に臥して居りました。母は弘前の別荘に闘病生活の次男謙行と疎開して居りましたので、南方で戦死した四男謙介の嫁正子が一人看病して居りました。

十一月末病状が悪化致しましたので、慈恵医大病院に入院致しました。私は病室に一緒に寝泊りし、病院より通勤するようになりました。翌昭和二十一年三月十二日病院で病死するまで、病室ではありましたが、始めて父と四六時中一緒に居り、いろいろと話しが出来た事は、大学卒業までは殆んど対話を通じての父と子としての実感をあまり感じなかった私としては、最も印象的であり又懐しい思い出として、強く心に残って居ります。

入院中食後にはしばらく雑談することを許されましたが、その中で現在までも忘れられない言葉として、仕事の報告では、「……だろう」「……でしょう」「……かも」と言う事は絶対いかん、何事にも責任と信念をもって、明確な意志表示をすること。「他人に迷惑をかけるな」と言う事でありました。

最後になりましたが、毎年正月に、銀行、会社などから手帳が参りましたが、その中から撰んでほしいのをくれました。その時必ず手帳の最初の余白に一筆書いてくれました中で印象に残っているのは——

一、いつまでも、あると思ふな親と金
　　ないと思ふな運と災難
一、今年はよい事あると

思ひ懸け
一生懸命　勉め励めよ

# 父の思い出

藤田謙五
（謙一の五男
元大阪商船三井船舶常務
馬場大光商船社長）

私にとって亡父の思い出は、大変遠くそして又同時に非常に近く感ぜられます。亡くなって約三十年の年月が既に経っており、その意味では確かに遠い昔の事になって了いました。然し同時に私としては、父の折りにふれた言葉や行動から教えられたものは、今尚私自身の内にハッキリと生きており、その〝感じ方〟は自分自身が年をとり、いろいろな経験にぶつかればぶつかる程益々強く、且つ濃くなって来ています。

私の記憶から言えば、幼少時代に接した父の思い出はそう多いとは言えません。その点父は所謂マイホーム型ではなかったでしょう。勿論、当時は今と社会環境も大変違っており、その様な比較自体意味は少いでしょうが、それでも特に父は、社会人としての広範囲な活動に大きな時間をさいていたのは事実であったでしょう。私の過した幼年時代、少年時代といえば、丁度大正末期から昭和の初期に当っており、日本全体も政治的経済的に大きく揺れ動いていた時でしたし、恐らく父の一生の中で

も最も活躍の場を与えられていた時であったと思われますので、家庭に於ける父との接触の機会が少なかったのも亦当然だったかも知れません。

断片的な記憶の中でも、特に印象が濃いのはお正月でした。父は訪客の合間にはよく〝書〟をものしていましたが、墨をすったり、紙を拡げたり、その手伝いを傍につきっきりで喜んでやったのを覚えています。又時には、お雑煮を祝ったあとの腹ごなしだと言っては、長い廊下を雪の降る庭を眺め乍らブラブラと往ったり来たり歩き廻るあとを男の兄弟が皆んなつながる様にしてくっついて歩き廻ったりしたものでした。我々子供達にとって、朝からズッと家にいる父は珍らしい事ですし、何んとか傍にいようとしていたのでしょう。その意味で、子供としては誰でも喜ばしいお正月の休みが、父と一日中一緒にいられるという事で、二重に嬉しく楽しい時であった感じをもった兄弟は、恐らく私一人ではなかったと思っています。

夏の休暇に避暑に行く時も、大抵母と長男以下の子供達で過す事が多かったのでしたが、父は必ず一―二回は、母代りにいつも東京に残る長姉を連れてやって来ては数日滞在してゆきました。そういう時は、母に厳格にきめられた午前中の勉強時間のスケジュールも免除されて、父と一緒に家族全員が近くの散歩や、偶には朝から舟遊びや、近郊の名所見物にゆけるのが何よりの娯しみで、〝いつ来るのか〟と何度も母に尋ね、せがんだものでした。

その他にも、偶には早く帰って来た父が、家で食事をする事があると、子供達が皆んな或いはラジオの前を離れ、なかには勉強を放り出しても父の廻りに集り、父が食事をし乍ら母といろいろ話しを

するのを眺めていたものでした。そういう時の父と母の話題は、大抵家庭内のことでしたから自分自身もその話題の内に登場する事が皆んなの大きな関心事でした。父は目の前のものしか喰べない癖があり、（恐らく始終何か考えでも練っていたのでしょうが……）それを心得ている母が傍からお皿を時々取換えては、それが余ると一番幼なかった私に母が呉れるのを待遠しそうにしていたのも懐しい思い出です。

又、庭で兄達と剣道の練習をしている時に父が帰って来た時なぞは、洋服の着替えをせかす母を待たせた儘廊下に立って、〝元気がないぞ〟とか〝しっかりやれ〟とか声を掛けていました。そういう後ではよく、「父が小さかった時、御維新の時の函館戦争に参加したという祖父に雪の積る庭に素足で撃剣の稽古をさせられ、寒かろうが、ヘトヘトに疲れようが、ビシビシやられたものだ」といった話をし乍ら、私達の生易しさに活を入れさせられたものでした。

私と父との接触の中で家庭的な団欒以外の場で、いわば父の公的な仕事の関係の一部に自分も一役買った様な気負った気持になっていた事もありました。それは支那事変中の時のことで、父が予て深交があり、又交通事情が困難になった時でも現地に自ら何回か往き来した、アジア諸国との交流を家庭の場でも実現した時の事でした。例えば、汪兆銘政府の要人の子弟や、蒙古政府首班の子息達が滞日した間ズッと家庭に引取っていましたが、当時学生であり、又その子息達と年齢的にも近かった故で、所謂学友としていろいろな機会を一緒に過したものでした。時代がすっかり変わった今になっても私としては、他国人と本当の友人になる体験を持たせてくれた機会として意義深い思い出であった

と思っています。

まだまだ記憶は尽きませんが、私の体験から言えば、幼少年時代の父の記憶がそう多いと言えないのは、私自身五男二女の末子であり、年齢的にも離れていた故でしたでしょう。

その意味で、時々冗談の様に言う〝お言葉を掛けられ〟直接一対一の話が出来る機会が多くなったのは、大学に入ってからでした。

高等学校時代私は寮生活をしていましたが、これとても家が東京にあり乍ら、目白の寮に入ったのは、父の奨めでした。これは私が末子として今で謂う母の過保護を受け易い環境にあったのを危惧した父の考えから出ていた事を後で知りました。そういう点も、父は何か訓戒を言う時、一言断定的に言いますが余り詳しい説明をしません。言われた者が自分で考えて判断するのを期待していたのであったと思っています。

その寮生活を終えた学期末の休みに家へ帰った私に、父は受験について質問しましたが、私は生返事しかしなかったのを憶えています。実は既に東大を受験した後だったのですが、発表結果を待ってから話そうと思っていたのでした。合格確定後、相談しなかった事を怒られはしましたが、父が大変喜んでいたのは事実で、その証拠に、入学式に父が同行すると言い出して、母を驚かせました。凡そ子供の学校に父兄としてついて行ったのは、後にも先にも此の時だけだったと母は語っていました。これも姉や兄が皆結婚や勤務先の都合で家にいなくなっていた事もありましょうし、父も年をとってきていたこと、更には、当時の父の活躍の時期も最盛期を過ぎて、心や時間の余裕もあったのかも知

れません。

入学式に同行した父は、大人しく固い椅子の父兄席で永い式の間ジッとしていたのも、家で心配していた母を驚かせた事でした。然も昼食時になって、外で久し振りに父に御馳走してもらおうと思っていた私の期待に反して、学校側が学生食堂を父兄に開放しているのを知ると、〝見ておこう〟と、逡巡し勝ちな私を促し、当時まだ珍しかったセルフサービスも自分でやり乍ら私と食事を共にしました。まだ大東亜戦争直前でしたが、そろそろ物資の欠乏がひどくなり、兎の肉かなにかのメンチカツ位が最高の料理であったと覚えています。

尤もそのお蔭かどうかは知りませんが、後で〝時には昼休みに時間があれば事務所に訪ねて来い〟と言われました。丸ビルのオフィスに行くと、九階の精養軒の一番奥の左側のテーブルが父の定席になっていて、よくそこで父と食事を共にしました。然しその昼食は、食事自体につられて行った私に大変良い人生勉強の機会を与えてくれました。父は私とだけでなく、その時オフィスへの訪客の方々と食事を共にし乍ら、文字通り談論風発するのが常でしたが、そこには、或いは政界、財界、或いは法曹界、教育界、医学界等々各界の名士の方々やあとで要職に就かれた方々が同席されましたが、その話題も、実に豊富でした。その方々のお話そのものの内容が全部理解出来た訳ではありませんが、その内から私は、いわば〝ものの見方〟を教えられ、〝人間の生き方〟を学んだと言っても過言ではないでしょう。

そこでの体験は、父によく言われた〝教科書の虫になるな〟とか、〝男子は正しいと思った事をやり

抜け〟とか、度々の訓戒を文字通り肌身に感じた事で、教科書から汲み取れぬ所謂〝生きた学問〟に接する機会を与えられたと非常に感謝しています。父も偶には、私に栄養をつけてやろうという気持もあったでしょうが、寧ろそういう耳学問をさせようというねらいが主であった事は、私がそれ等の話から何を掴んだかを時々尋ねられたことからも明らかでした。

最後に私は、此の拙文の標題を『父の思い出』としましたが、私の卒直な感じでは、いわば『オヤジの思い出』としたい処です。勿論、亡父が生存中は、『お父様』と呼び習わし、又それが家庭の環境からいって自然でしたが、今私の心にある亡父は、唯私の実の父親という以外、社会の大先輩としても、心から敬慕すると共に、親愛感をこめた所謂『オヤジ』という呼び方が一番ピッタリする感じで、今も、私の心の中に生きているからです。

## 追憶の藤田謙一先生

楠　美　省　吾
（元衆議院議員・日産サニー弘前販売㈱社長）

藤田謙一先生は明治、大正、昭和の三代に亘り、東亜を舞台に活躍した実業界の巨峰であった。

先生と私の父芳幹は、弘前高等小学校、東奥義塾、明治法律学校を通じて同期の桜であった関係で、中学生の頃から、父に伴われて再三訪問し、親しくその謦咳に接することができた。

大正十四年、私が弘前高等学校の一年の時先生は貴族院議員の選挙に出馬し、僅か五、六票の差で

鳴海周次郎氏に敗れた。明治二十三年以来の青森県で行われた選挙で最も高額の費用を要したと語り継がれている。

恰も夏休みで、高野の生家にいた時、東京商工会議所会頭であった先生が、多額納税議員の有資格者である父に向い「胡座で、金を使わずに一票頂けるのは貴兄位のものだ」といっていたのを聞いた。これが、しかも、開口一番の挨拶であったから驚いた。

当時、私設知事の称があった竹内清明が上京して先生を訪ね、「五万円、政友会に寄附すれば貴族院に無競争で当選できる。」と勧めたので承諾した。二、三日後、内金として一万円を渡してほしいといわれたが、竹内氏の人物を知らなかったので先生が躊躇している間に、待ったがかかった。それは、阿部武智雄代議士が、もう一度出馬するために、平山為之助氏（元衆議院議員）の実弟である車力村の鳴海氏を推すことになったからであった。これに反対する黒石の鳴海文四郎氏（前代議士）が藤田派に廻り激しい選挙戦となった。有権者百名足らずの多額納税者の間で、一票五千円が相場で、双方から受取る者があったり、土壇場では、一万円（今の一千万円以上）で取引されたといわれる。

両陣営をあわせれば百万円の金が動いたことになる。この一戦で西郡一の大地主の鳴海家が倒産する結果になった。

私には、この選挙の敗北が藤田先生の晩年の不遇時代の前兆とも考えられてならない。その著しいものは、いわゆる売勲事件であった。要すれば、先生に対する政治的謀略の犠牲となったのである。

昭和七年頃、二人の弟とともに神宮外苑の野球見物をしていた時、弘前出身の石郷岡岩男検事と偶々

同席しての四方山話で、この事件で、重点を置いているのは輸入毛織物の関税問題で、売勲事件は世上伝えられているのは真相でないと語った。

天岡賞勲局総裁は某首相の落胤で、先生が後藤伯から面倒を見てほしいといわれたので、節々に金一封を届けていた。

それを女中に手渡して帰ったのが、問題にされ、不名誉な事態を招来してしまった。

私の調査したところと、直接担当の石郷岡検事との話は符号し、その確信を深めた次第である。

先生は政商という側面もあったので、いわば、政敵たちの攻撃目標となったのである。

昭和五年の春、私は東北帝大の学生二十数名とともに満韓視察団に参加し、北京の八達嶺（万里の長城）まで旅行した。当時、万宝山事件、中村大尉殺害事件などが相つぎ、排日、侮日の感情が高まり、日本人が総退却せねばならぬ状況であった。事変勃発の予感がして、私は、昭和六年卒業後も就職しないで時節到来を待った。果せるかな、九月十八日満州事変がおこった。先生のところへ、相談に駈けつけたら、今にお迎えがくるから、それまで待て、ととめられた。

翌年五月、即ち、建国と同時に、大同学院一期生の募集があり、幸いに試験に合格して堂々と渡満することになり、先生の先見の明におどろいた。この時の試験官が大川周明先生、佐藤貞次郎先生（弘前出身）であった。

満十年、満州で働いて、予定の行動で、昭和十七年の総選挙に出馬すべく、まず、藤田先生にご挨拶に参上した。自分でも失敗したのだから、当選は覚束ない、断念した方がよいとのご助言であった。

しかし結果において僥倖にも当選して御礼に参上したら、驚き且つ喜んで下さり、どうせ落選必至とみて、次の解散までの歳費と同額の金三千円を満蒙毛織の椎名義雄社長より出す約束になっていたのを、そのまま当選祝いとして頂戴することになった。その上、盆と正月には必ず金一封を援助して下さったのである。

一区の三浦一雄代議士（元農相）も贔屓にして、私と二人を呼んでは、銀行統合等のニュースを逸早く入手して伝えてくれた。

戦時中で、私も多忙に紛れて失礼していると一ケ月に一度は電話で呼び出される仕末であった。午前中の客は、全部丸ビルの九階の精養軒の藤田テーブルに集め、昼食を共にしながら、一つ一つ用件を片附けて、後は四方山話になる。

いつでも、客が全部見渡せるテーブルで、悠然と天下様のように食事を摂るのであった。

また、その頃の先生の一面を伝えるエピソードにこういうことがあった。

私が東京駅の荘司理髪店にとびこんで、十五分で済ませてくれ、というと、久方振りに藤田謙一のような客が来たという。

先生の場合は鬚そりを一分でやれと、ストップウォッチを持って、五十七秒五十八秒と計りながら叫んだ由である。

翼賛壮年団出身の代議士と、幾度か会食したが、ある日翼壮が天下を取るか、解散されるか、どっちかになると先生が予言したが、半年もたたぬうちに解散となり、その直感力の鋭さに感銘したこと

がある。

当時私は三十六才であったが、先生は、品川の砂風呂跡で、お光さんという有名な女将相手に若さを発揮していた。

先生の黄金時代は、後藤新平伯の四天王の一人として、永田秀次郎氏（元東京市長）らと共に側近として活躍した頃で、政界財界の大立物の久原房之助氏でさえ、先生には一目置いた由である。先生が久原氏を震災内閣の内相をしていた後藤伯に紹介したら、帝都はもっと地盤の堅いところに遷さねばならないと意見を具申したので、どこがよかろうということになり、六甲山以外に適地がないと答えたので、伯は、後で、自分の土地に皇居を作ろうとしているのだと、笑っていた由である。

後藤内閣が出現すれば大蔵大臣か農商務大臣として入閣し、縦横の働きをした方だろうと思う。その実力を示すエピソードにこういうことがあった。

堤康次郎氏（元衆議院議長）が永井柳太郎拓相の下で参与官に就任したいと運動していたころ先生が永井に会い、一つ格上げの政務次官の約束をとりつけ永井邸から帰る時に来客中に堤氏がいるのを発見して、このことを耳打ちして喜ばせた。

最盛時には、三十八ケ所もの別荘を所有し、豪奢をきわめ、赤坂の星ケ岡茶寮も一時は先生のものであった由。また、日本劇場も先生が買収したことがあり、渡満前の私に、「将来のためにいい経験になるから、経営してみないか」といわれたことがあり、今でも数寄屋橋を通るたびに、先生を想い出し、なつかしい気持に駆られる。

先生は、東京が焼野原になり、やがて、敗戦を迎えても、いささかも悲観せず、日本民族の再建を堅く信じて、日本の進路は農工併進にある旨を語っておられた。

昭和三十年頃、華族会館で、ラテンアメリカ協会の発起人会に出席した時、足立日商会頭、一万田蔵相、藤山外相など政財界の大立物ばかりの雑談のなかで、藤田先生のことが話題になった。異口同音に「あれだけ、気宇壮大なスケールの大きな実業家は、日本の財界には、今後出現しないであろう」と賞賛していた。

藤田先生は郷里の弘前市に公会堂を寄贈したり（このことについては、昭和四十六年十月十五日の陸奥新報の「碑は語る」87の「公会堂碑」に詳しい）、岩木山麓の枯木平にある八百数十ヘクタールの農場を東奥義塾に寄附したり、創立した会社、関係した仕事は枚挙に遑がないほどの功績を残したが、後世への遺産として最も注目すべきものは、青少年学徒の育英事業であったと思う。

大正十年に官立弘前高等学校が開設した時、個人として最高額の寄附をした先生は、一方において二十五万円を投じて、東京と弘前に藤田育英会を組織設立し、多数の英才を訓育し、欧米にも留学生を送った。郷里に高等学校ができたのを機会に、不遇な秀才を世に出そうとした先生の崇高な愛郷心には頭がさがる。

先生は勅選貴族院議員として活躍したが、私がお会いした最後は、亡くなる二、三ケ月前のことであったと思う。入院前のことで、森ケ崎のお邸でなく、疎開先の東京のお家と記憶する。病状がすでに重く、顔がむくみ、こんな時は、どんな人でも涙脆くなるものであるが、先生は意志の強い方で、

顔では完全に泣いているが、遂に涙を一滴も見せず、お別れした。その時も、「東奥義塾に寄附した枯木平の農場は売却しないで保存させるように笹森塾長に伝えてくれ」と遺言のように、力を入れて申された。

私は、病床に臥される前に、先生から形見として伊万里焼のライオンを、「王になれ」といわれて頂戴していた。しかし勿論、先生からいただいた無形の数々の教えは、少年時代から私の人生哲学を形成する柱となって、両親にも勝るご恩を受けたという思いがこみあげてくる。

たとえば、その一つは今でも、私の会社における人事管理の指針となっている。

「同時に入社した青年社員数名のうちの一人が、抜群の働きをしたにもかかわらず、それが認められないで、要領よく立ち働いて上司の機嫌をとったものが昇進するというような人事異動が行われたときは、泣き寝入りをしてはいけない。まず人事課長に抗議し、それでも解決しないときは、部長役員、そして最後には社長まで訴えるべきである。もしも、社長も理解を示さないようなら将来性のない会社だから退社すべきだ。勿論仕事は人の二倍もやってからの話である。」

最後に、弘前の藤田別邸にまつわる思い出を一、二述べて、この稿を終りたい。

別邸の管理人は明石準一郎さんであったが、世間には、楠美代議士が鍵を持っているということになっていた。終戦直前、大東亜大臣室で、満州国皇帝の疎開先に山梨県の山奥にある根津嘉一郎氏の小じんまりとした別邸を候補にあげて、打合せをした後、私は早速藤田先生に相談した。先生は、一国の皇帝をそのような小さな家にお迎えするのは礼を欠くことになる。弘前の別邸でよければ提供す

る、とのことであったので、その旨を青木一男大臣（参議院議員）に伝えると、非常に喜んで、弘前にお迎えすることにしたいといった。

しかし、皇帝が日本へ向う途中、奉天空港でソ聯軍に捕えられ、来日が実現しなかったのは残念なことであった。弘前へお迎えしようという先生の配慮の底には、侍衛長の工藤忠閣下の郷里であることが何かと好都合であるということがあった。

また留学中の蒙古王徳王の王子トガルソロン一行を大井町の本邸の一棟を迎賓用に充てて迎え、さらに弘前の別邸や大鰐の安達家の別邸で一夏レジャーを楽しんでもらったこともあった。

追憶のなかの藤田謙一像を追うて、私の受けた影響の大きさを今更のようにしみじみと思うのである。

## 藤田謙一先生を憶う

羽賀　良太郎
（元弘前市助役・青森県総務部長）

東満州人絹パルプ股份有限公司、本社は満州国関東省開山屯に置かれ、支社は東京駅前丸ノ内ビル四階にありました。私が初めて藤田先生の謦咳に接したのがこの丸ビル四階に在る支社の社長室でした。明石桐一さんのお世話で社長さんがご面接するとのことでありましたので社長室に出頭しました。

そこでは先生が私の履歴書について一つ一つたずねられ、また履歴書に書く内容の持つ意味につい

ても訓えられ、最後に「この履歴書（美濃紙に毛筆で書いてある）は三枚にわたっているが、今少し文字を小さく書けば二枚で間に合うのである。紙一枚と雖も節約をしなければならない」と、懇々とお話しをされたのです。そして短刀直入に「いくらあれば暮せる、月給はいくらほしいか」などとざっくばらんなお話しもされて面接を終ったのです。会計課勤務となって直ちに勤務についたわけです。それは昭和十一年十一月下旬のある日でした。

会計係の勤務は実に厳しかったが愉快でした。午後の五時に竹葉亭の晩御飯をたべてから、仕事はこれからだということで、午後十一時頃まで残業し、板橋の借家に帰ってからまた改めて晩御飯をたべ、それから簿記原稿、経済学等を勉強して寝るのが午前一時、次の日は午前八時頃までに出社、これを毎日繰りかえしていったのです。時折藤田先生が午前八時か九時頃会計課のドアーをあけてニコニコしてはいってきて、「やってるね」と言って私等同僚三人を激励してゆくことがたびたびでした。

或る時丸ビル四階の廊下で先生にお会いしましたら私をつかまえて、「今日は政治談義をきくんだ、鳩山が来るってねェ」と言うなどそれとなく知らせることもありました。先生は非常に声が高い方で、社長室でもガンガン、丸ビルの廊下でもガンガンと話しながら歩き、庶務課の人達は「ああ社長が帰って来た」と言っていた位でした。

庶務課の吉田さんは私のことを「羽賀さんは社長に叱られ方が上手だ」と言っていましたが、私には社長から叱られているという気持ちは少しもないのです。先生からのお話しはすべてこれからの自分の成長の重要な要素となるものであり、この訓戒をあだやおろそかに考えてはならぬと心に決めて

いるものですから、叱られているなどとはとんでもないことで、頭をたれて一つもききもらすまいと努力している姿が叱られ上手に見えたことでしょう。社長室に用務でお伺いして、その用務が済んだ後で、会社の資本の系列や社内の人についてお話しをして下さったこともありました。

この様に愉快に働いておったのですが、そのうちに身体が何時の間にかだんだんやせていき、気がついた時は相当のやせ具合いで、或いは結核になるかも知れないと心配し、心ならずも会社をやめる決意をして辞表を出しました。東満パルプ入社以来六十三日でした。

その後故郷へ帰り、今住んでおる女鹿沢山のりんご園で静養しましたが、昭和十二年八月青森の歩兵第五聯隊に召集された。身体検査で軍位少佐殿が私の身体をひと目見るなり、「骸骨の如し、即日帰郷」と宣言して私を帰村させました。それほどやせておったのですが特に名のつく病気にもかからず今日に至っております。

会社をやめる時藤田先生に御挨拶と御礼に社長室にお伺いしたところ、先生は、「君は故郷へ帰っても食えるからやめて帰る気になるのだ。僕は十七才の時に故郷を出て来て以来鉄石の心でやってきた。故郷へ帰ってしまうなどとは一度も思ったことはなかった。君は帰ったらよく養生するように」と言われた言葉は今も耳朶にはっきりと残っております。

昭和十七年八月から私は弘前市助役をしておったのですが、昭和十八年？　或は十九年？　の晩秋だと思いますが、藤田先生が蒙古王徳王の御曹子トガルソロンという青年を連れて弘前市の初等教育の視察に御出になられたのです。

御曹子トガルソロンは普通の青年で、右手前に短刀を帯びていました。先生は市の助役に私がおったものですから、驚いた様でもありホットした様でもありました。先生は久し振りで弘前へ帰られたものですから、市内の重だちたる人々を一夜御招待し、御曹子トガルソロンをも御紹介したいとのことで、「人数三十人位、場所は別邸（藤田別邸）、人選は助役さんに任せるから、特に席次の順序を間違わぬ様に、東京では席次は非常に大切で、これを間違うと大変なことになるから、よく注意して」と私に話されたので、「市長さん（葛原運次郎先生、元県立弘前中学校長）ともよく相談して間違わぬ様にいたします」と先生に答え、市長さんにも藤田先生の考えを御話して、人選と席次を決めて報告しましたら、「君が良ければよい」と言われてそのまま採用されて、楽しい一夜を過されました。

御曹子トガルソロンの宿舎は和徳町の安達の下駄屋さんの別荘にお願いしたようです。大鰐町の方でも蒙古王徳王の御曹子ということで歓迎の宴（戦時中ですからささやかなものでしたが）を催され、大鰐町の奥様方も御手伝いに見えたようです。

弘前市立の小学校、朝陽、第一大成、第二大成、和徳、時敏、城西の各校のすべてであったかどうか今はっきりしませんが先生は御曹子トガルソロンを連れて連日教育視察をしました。そして視察した各校毎に謝礼として数千円づつ差上げたのでしたが、私を見て「市もほしいか」と言われたので、「市はほしくありません。唯一つお願いがあります。それは市では今、嶽の山奥で市営製炭をしています。ところが木炭の集積倉庫がないので困っております。嶽にある自動車倉庫を使わせてほしいのです。」先生は即座に「ああよい、自由に使いなさい」と言われたので、その後市営製炭の嶽集積倉庫

とし、市では非常に助かりました。

約一週間ばかり弘前市に滞在され昼過ぎの奥羽線廻りの汽車で帰京されたのですが、弘前駅まで見送りましたが汽車のデッキから私を見ておられたお顔を忘れることが出来ません。

先生にはその後お目にかかることはありませんでした。先生から受けた数々の訓えが私の身体に、精神に無言に生きています。

（昭和四十八年四月十日　浪岡町女鹿沢山のりんご園にて）

## 先生と私

柘山寿郎
（元秦野商工会議所会頭）

大正三年、私が十三歳のとき田舎の小学校を終え上京、叔母の桑原みつの世話により先生が関係しておられた後藤毛織の東京銀座の製品陳列所に就職、給仕として勤めることになりました。

この陳列所の奥の二階に先生の立寄る事務所がありまして、毎日一度はお立寄りになられました。入社して先生に初めてお目に掛った時、先生はツツポ前掛け小僧姿の私を見て「チッチャな子やなー。その内にだんだん大きくなる」とおっしゃられて、「毛織会社だから洋服でなくてはいかん。早速洋服を作ってやりなさい。」「若い者は暇のあることが一番悪いから、会社が終ったら近くの夜学へ通って勉強しなさい。」と入学の手配を命じて下さいました。そんな訳で私は近くにある泰明小学校の夜学部（京橋区第二実業補習学校）に二年間勉学させて頂きました。

先生が毎日事務所へ自動車でお着きになると、私は何時も先生の靴に茶色の靴カバーを御付け申し上げてから先生は階上の事務所へお入りになりました。それからお茶を差上げるのが私の仕事の一つでした。

入社した冬のある寒い朝いつもの様に朝の掃除をして居り、水で雑巾掛けをして居りましたら、先生がお立寄りになり、一目私の手を見て寒さで万十の様にしもやけしている手を御自分の手に取り、「何と冷いのだ。爺やに言って湯をもらってしなさい。」と言って下さいました。私は今でもその有難いお言葉を忘れることができません。

大正五年後藤毛織が神戸の鈴木の資本参加により、社名も東洋毛織と改称せられました。或る日藤田先生が鈴木の金子直吉さんを大井工場内の本社事務所に御案内せられた事がありました。私が応接室に御案内申上げてお茶を差上げた際に、先生が金子さんに「これが一昨年神戸の本店に御願いした柘山の弟です。」とご紹介下さいました。金子さんは暫くうなずかれて「兄さんも元気で働いているから安心しなさい。」と言って下さいました。大層うれしく存じました。

先生は毛織関係については明治の末期より大正時代と昭和二年迄の十六年間を社長職として御苦労なされました。私は此の間十四年間、少年、青年時代を先生のもとで過させて頂き、何かとご薫陶を頂きました。

このように先生は非常に温情の豊かな人でした。そして常に用意周到でその注意は細心、毫末と雖も、いいかげんにしない。しかも一旦断乎として之を決すれば飽くまでも徹底しました。断じて之を

行えば鬼神も之を避くる信念の人でした。

しかし温情の溢れている人だけに情に訴えてすがられると自分の利害など眼中になく即座に快く承諾して力を尽しました。先生の情に浴して窮地より救われた人は数え切れません。

先生は非常に明晰な頭の持ち主で時勢を洞察し、財界にせよ、思想界にせよその落ち着く先を見誤りませんでした。先生の卓見は常に時、人に百歩を先んじました。

先生の主宰された東京毛織株式会社の経営は毛織業の発達しない日本だけに苦心を極めたが、やがてその製品は多年の経験のある外国製品に遜色を見ないまでになって毛織製品は輸入品目から減少していきました。その他いずれの関係会社も業務が隆盛し、先生の中央財界における地位が重くなりました。

先生は曲ったことが大嫌いでありました。東京商工会議所の改革問題がそれで、藤山雷太会頭が多年傍若無人の振舞いをほしいままにして会議所多年の権威を失墜せしめたので、先生が遂に陰険なる藤山会頭を放逐したことは周知のことでした。

## 藤田謙一について

藤山　愛一郎
（元外務大臣）

私は大東亜戦争に突入した昭和十六年春、東京・日本両商工会議所会頭に就任し、終戦の翌年迄両

商工会議所会頭の仕事をした。

私が初めて商工会議所に入ったのは会議所会頭を二代勤めた父雷太が大正十四年の会頭選挙で藤田謙一氏（東京毛織社長）がかつぎ出した郷誠之助氏に一票の差で破れて会議所を引退した時、「私の代りに会議所へ出ろ」といわれて昭和四年の議員改選のとき会議所議員になったのが始めてである。

当時の会議所は藤田謙一氏が会頭をしていた。藤田会頭は腹の太いところを見せて私をただちに常議員にしてくれたのである。

（「私の履歴書」より）

## 藤田謙一氏の思い出

渡辺綱雄（弁護士）

藤田謙一氏の容貌は魁偉であり、額は広く眼光は炯々として一見人を圧する風貌の人であり、言葉に東北訛りがあり、それが魅力だったので一度お目にかかると容易に忘れることの出来ない懐しい存在の人であった。

大正時代から昭和にかけて政財界の世話役であり、罷り通った第一人者として今日も意外千万で、近来は政財界人共に小さくなった気がする。藤田氏のような天衣無縫綺言奇行のリーダーはないのではないかと思うのである。死して惜しまれる人というのは概してこんな人であろう。

ではこれから私の承知する、全盛時代ではなく晩年の藤田氏のこぼれ逸話を紹介したい。

## ㈠　昼食のテーブルを二カ所確保する

藤田氏の事務所は東京駅前の丸ビルにあったが、昼食のテーブルは丸ビル八階の精養軒と三菱の赤煉瓦の中央亭の一角に藤田氏専用の食卓テーブルがあった。

全盛時代ならばともかく、晩年の藤田氏は何故こんな不経済なことをするのかということに興味を持った筆者は、その謎を解くために暫らく昼になると藤田氏の愛用テーブルに交代に黙って席について黙って御馳走になった。タダ飯を食うために集り散ずる人の中に各界各様の人がいた。

ある日私は藤田氏を尊敬し、毎日藤田事務所を訪れる後の法務大臣殖田俊吉氏に二つのテーブルの由来を尋ねた。殖田氏は「あれはね、御承知のごとく藤田老の高邁な道楽ですよ。晩年の藤田老は仕事からも段々手を引いておるので、経済的にもそれ程恵まれてないので、人にタダ飯を食わせることは容易ではないと思われるが、それをあえて実行するところに藤田大人の豪さがあるのですよ。テーブルに集まる人は藤田氏から金や物や知識を求め得んとする人が大部分であって、プラスになる人はほんの僅かですよ。藤田という大人はこうした無駄を平気でやる人だから、訪問者が絶えないのですね。」とつらつら話してくれた。

現在のように、とんがらがった時代に望まれるものはこうした無駄の出来る大人である。藤田氏の秘書で有名な神川宗當さんは、よく筆者に次のような話をしてくれた。

「法律顧問のあなたは千万ご承知のはずだ。藤田は今、会社や個人の債務保証のために大変苦しんでおられるので寄付する金はないのですよ。それなのに人から乞われるとすぐに神川、神川と私を呼び、

二百、三百、五百の金を持って来いと命ずるのです。今の金に換算すれば二十万、三十万、五十万ということになる。その他にまとまった政治献金をしますので、事務所の連中は大むくれです。藤田はそのことを承知しながら人に頼まれるとすぐに忘れてしまって、おい、神川君、です。」筆者もそうした場面には何回か出くわしたことがある。

## ㈡ 無銭旅行の話

藤田氏の丸ビルの事務所と筆者の三菱仲十一号館の事務所は近くだったのと、当時三菱の赤煉瓦の暖房はファイヤープレイス（暖炉）に薪を焚いて暖を取っていたのが英国式で懐しいといって、藤田氏はよく気分休めにやって来ていた。

ある日ファイヤープレイスで尻をあたためていたが、突然「渡辺君は無銭旅行をしたことがあるか」と聞かれた。ありません、と返事すると「そうか、僕はあるんだよ。実はね、満州から支那を無銭旅行してきた。存外いい気分なもんだ」と嬉しそうに話されたので、すかさず筆者は、よく逮補されずに無事帰国ができましたね、と反問すると「君、誤解せんでくれたまえ。僕のいう一カ月の無銭旅行はな、金を払わずに食い逃げする旅行じゃないのだ。金はちゃんと支払いする旅行だが、その金は僕が払うのでなく行く先々の旅費や旅館代はその地方に生活する有志が払ってくれるという、世にも有難い無銭旅行なんだよ」と釈明してくれた。「しかしこれには少しばかり種がいるんだよ。なに、種の説明か、それはね僕がかつて郷里青森の育英会に育英資金を百万円寄付したんだよ。（註・今の金にすると十億）その金で勉強した青年が満州や支那で外交官として又は実業家として活躍しているんだな。

それらの人と僕が道楽で支那の要人の面倒を見た。その要人らが期せずして合流して僕の旅行を慰安歓迎することとなり、金のある人は金を出し、智慧のある人は智慧を出し、力のある人は力を出して僕を迎えてくれたんだよ。一カ月の旅行なんだが気楽でいい気持ちだったよ。」といって眼を細くされた。

### ㈢　筆者恥をかく

赤坂の山王様に「星ケ岡茶寮」という料亭があった。大正の終り頃から昭和の中期にかけて東京で第一級の料亭として、毎日各界の名士を集めていた。今夜は星ケ岡茶寮だよというと、筆者のごときは若くもあったが、にわかに出世した気になり俺も一人前と心底思ったものだ。そんなある日、私は藤田氏や殖田俊吉氏らを星ケ岡茶寮の田舎屋の室に招待した。田舎屋の室というのは室全体が田舎風に造られており、田舎の風情を一杯出しておるので、これならば藤田大人にも喜んでもらえると思ったからだ。ところが藤田氏は室に入ると開口一番大声で「これは一体どうしたというのだ、俺が別荘として親しんだ時代の面影はどこにもないじゃないか、田舎を知らない奴が物知り顔して改造したんだね、これじゃお客さんに気の毒だよ。」そこは天衣無縫の藤田大人だ、誰に憚ることなく怒鳴られた。もちろん藤田大人は僕の不見識を笑ったのではないが、今思ってもあの時は恥かしい思いをした。

晩年僕は藤田大人の別荘等を処分したが、どれ一つ取っても天下の一品と関係者は驚いていた。

### ㈣　電車賃は十三銭だよ

四月の暖かい花の香が一段と強い日であった。藤田大人が突然拙宅（渋谷の現住所）にあらわれた。

庭をブラブラしていた僕の側に急ぎやって来るなり大声で「渡辺君は物知り博士だが電車賃はいくらか知ってるか」と詰問された。私は電車党だったので、十三銭は承知していたが、大人は初めて電車に乗ったんだな、と察知したのでわざと声を低くして電車に乗りませんので下々のことは存じません、と笑いながら答えると「そうか、それじゃ教えてあげる、よく聞けよ、電車賃は十三銭だ」といわれた。

藤田大人は、かつては藤山愛一郎さんのお父上と東京商業会議所の会頭の選挙を争って当選された人である。あの頃の藤田大人は彼の動くところに新聞記者がお伴していた。

それだけに美談逸話の持ち主として、今でも話題になる人である。物事に屈託をしない、頭のいい人であった。